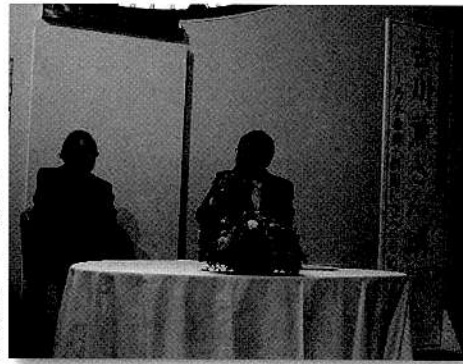


▲北九州市立文学館 開館一周年記念  
古川薫さん講演会

乃木希典「斜陽に立つ」をめぐって

11月11日(日)



古川薫さんと佐木館長

開館一周年を記念して、下関市在住の直木賞作家・古川薫さんをお招きして講演会を開催。毎日新聞日曜版に連載中であった「斜陽に立つ」についてお話しただきました。聞き手は館長・佐木隆三。

佐木 作品を書くきっかけは。

古川 私は山口の生まれで乃木さんには子どもの頃から親しんできましたが、司馬遼太郎の「殉死」という作品で「乃

木愚将論」が日本に浸透しています。司馬史観そのものに反論はしないが、乃木さんについて書かれたことは違うと言いたい。乃木さんがかわいそうだというのが動機ですね。

佐木 六本木ヒルズから始まったのに意表をつかれました。

古川 上京して乃木さんの生地に行ったら六本木ヒルズで、近未来都市のようになっている。なんとここで生まれたか、面白い、書き出しはこれだと思いましたね。

佐木 なぜ「斜陽に立つ」という題になったのでしょうか。

古川 乃木さんは漢詩を多く作っていて、「金州城外作」という有名な詩の一節が「金州城外斜陽に立つ」。二人の息子を前線で戦わせたため、まず長男が戦死し、次に次男が戦死した所が金州城。しかしこの詩は息子だけの鎮魂ではなく、そこで死んだ四千五百人の日本兵とともに悼んだので

す。夕陽が差す金州城で乃木さんが直立不動の姿勢で立って、寂しげな、しかし軍人としては毅然としたイメージがあつて、「斜陽に立つ」としました。乃木さんがあつて、「愁い顔の軍神」だと思っています。

佐木 司馬さんは吉田松陰や乃木希典など長州人を悪く言うのはなぜでしょう。彼は大阪の人ですよ。

古川 関西とは資質が違うのでは。兵隊の時、私達の班は大阪人と長州人が半々で、水と油でした。それに司馬さんが長州人について間違つた事を書くと、山口の人は抗議の手紙を送るらしい。そういう事が重なり、乃木をはたき落とすやれと思つたんでしょうか。実際に司馬さんは「長州人が嫌いです」とおっしゃつた。長州人の目の前でよく言うなと思ひました。それが顔に表れたんでしょう。司馬さんが言うには、なぜ僕が長州人を嫌いかと言うと、まず日本の陸軍は山縣有朋という長州人が作ったようなもので、日本人の壮丁はほとんど陸軍

に入ったのだから、日本人は陸軍を通じて長州人の血を流しこまれている。だから私自身も含めて、日本人批判のつもりで長州人を批判するんです。うまいこと言いますよ。恐れ入りましたが、待てよ、ごまかされたぞと。詭弁なんですよ。司馬さんはソクラテスも顔負けのソフィスト、詭弁の大家です。稀代の才能ですね。

佐木 この小説はこの先どうなるのか、会場にいる方だけに教えて下さいませんか。

古川 司馬さんの場合、乃木が愚将だったから旅順を落とせず、兒玉源太郎という將軍が鞍馬天狗のように現れて落ちたという結論です。しかし兒玉もそんなに優れた軍人だったのではなく、東北方面から伊地知參謀長が攻めて旅順が落ちたわけです。最後としてふさわしいと思つたのでラストシーンには自決にしました。以前小倉の方が、乃木將軍は奥さんを殺したと「殉死」で読んだと言います。改めて読むと、嫌だと言ふ奥さんに、

一緒に死ぬと言つて殺したような書き方になっている。怒りというより悲しくなりました。そんなに乃木を傷つけないといけないのかと。私は夫婦愛があつたと思います。そういう男の最期、男と女の最期を書きました。

(会場からの質問に答えて)

古川 旅順陥落後の水師營の会見で、乃木さんはロシアの將軍・將校に帯剣を許し、敵に恥をかかせないよう、調印の場ではなく集合写真を撮らせた。それで日本の武士道精神が世界に発信されました。会見にはアメリカの將軍アーサー・マッカーサーが息子ダグラスを連れて来ていた。のちに連合軍司令官として来日したダグラス・マッカーサーは乃木邸にアメリカハナミズキの苗を植樹しています。危険だと皆止めたんですが、彼は副官他五、六人の幕僚だけで来日。武士道を信用しているから大丈夫と言つたそうです。乃木さんは日本の精神文化を世界に知らしめたと言えます。